

特集: 感性的研究生生活

連載トップ http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/03/post_3.html

連載収録(1)～(13)まで

これは、社長ブログからの抜粋である。

ベンチャー企業の社長が研究発表をするというのは、珍しいことではないかも知れない。しかし、我が会社は、創業25年を超えてベンチャーと言われることもすくなっている。実は、彼の研究生生活は誠に年季が入っているのである。われわれにも研究発表をするようにしばしば強要する。仕事の邪魔のような気がしてウザッタイと思うこともないわけではない。彼は、研究主導型こそ我が会社の本来の姿と言ってやまない。そう言えばこの会社の設立の理念は「最新の科学技術を万人のために」である。研究があればこそ、われわれの生活も成り立っているということかも、と思ったりする。

それにしても、彼の研究のどれも紙と鉛筆と心がけだけでできているものばかりである。貧乏会社なのだからそうなのだろうけれど、みずからの心と対話しながらの研究が多いという意味で「感性的研究生生活」なのかな、と思う。署名にある「琵琶」とは社長のネットネームである。(SH Web Master)

(補1)この記事を引用または翻案して、公的に発言または発表される場合は、事前にメール等でお知らせください。

(補2)社長の個人ブログは下記の通りである。今も記事は書き続けられている。
<http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/>

(1) 学会発表-テキストの類似度

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/03/post_3.html

2005/03/24

学会発表-テキストの類似度--感性的研究生生活(1)

最近出来た新しい学会がある。新しい時代にふさわしい新しい内容の学会である。昨年の春できたばかりだが、親しい教授が会長をしている。なかなか盛況のようだ。近々、年會が開かれるので、お誘いを受けて、私も研究発表を予定している。

テーマは古くから取り組んでいる「テキストの類似度」である。ネット時代になって簡単にコピーが行われ剽窃が容易になった今日、著作物がそれぞれの程度似ているかを客観的に示す必要が生じている。現在のところ鑑定人が目で見比べて類似性を判断するという事になっているが、汎用的な客観的データもほしいというのが本音である。

このテーマは、今までも少しずつ内容を高度化しながら何度かいくつかの小さな研究会等では発表してきたが、今回は他の類似度の尺度との比較を試みることにした。比較してみると私の提案がどの程度有効化が見やすくなるに違いない。大きな学会で発表するのは今回が初めてになる。

今回、私が発表するのは、今までどおりの類似度の尺度（第一類）であるが、実は私の手元では第二類、第三類まで用意してある。今までのところ計算式の導出と計算例はすべて手作業である。今回も手作業だった。次回の発表の機会には、計算システムも用意して発表しようとひそかにたくらんでいる。次回こそ、学生かスタッフを共同研究者に加えて、少々規模の大きな計算も試してみようと思っている。

今は、じっと我慢で、個人作業にとどめて社会的な認知だけを求めることにしている。学会での反応が楽しみである。

琵琶

(2) 久しぶりの学会発表-文字列類似度の汎用的尺度-

<http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyosei log/2005/04/post.html>

20050331

久しぶりの学会発表-文字列類似度の汎用的尺度--感性的研究生活(2)

3月31日、久しぶりに学会発表を行った。今回は情報コミュニケーション学会 (<http://www.sonoda-u.ac.jp/cis/>) 第2回大会である。場所は千代田区駿河台の明治大学のリパティタワー(<http://arch.cside.com/f-meidai.html>) であ

った。会場は見晴らしが良く設備も申し分ないところである。会長の阪井和男教授からお誘いを受けて急遽発表することにした。もとより、自分の勉強のためと後進たちの発奮を促すためには自分の研究発表の数を増やすべきだと考えていたところなので、ありがたくお受けした。

<http://www.sonoda-u.ac.jp/cis/>

<http://arch.cside.com/f-meidai.html>

タイトルは「文字列類似度の汎用的尺度」とした。公正な情報コミュニケーションのためには、盗用を防ぐために公正な類似度測定が欠かせない。いろいろな分野で多様な尺度が用いられているがこれらの尺度を較定するためのグランドスケールがまだないことに私は剛を煮やしている。10年以上前から、警鐘をならして、小さなSH情報文化研究会等ではある種の計算方法を発表していた。今回は、日本では私の提案よりも後で使われるようになった Levenshtein の距離という尺度との違いを実例で示すことにした。以前の発表では、「前代未聞」の見解なので、多くの聴衆は同評価してよいかわからないようだった。

この「創造的提案への判断停止」という社会的心理現象は、一般に広く見られることであり、行政やビジネスの分野でも始終ぶつかるのである。しばしば、私たちの渾身の提案があっさり補助金の審査で落ちることがままあるのだが、多くの場合、審査員が評価不能だったということのようである。まあ、独創的発案を評価できるほどの自信はなくとも評価不能なものを推奨するほど無能ではないという人はいる。それはそれでたいへん結構なことである。

今回は、一般に知られている「尺度 (Levenshtein の距離)」と「私の尺度」の比較である。「尺度というものの有用性」については、Levenshtein の距離が曲がりなりにもいろいろな場面で使用されているのだから、説明が難しくない。聴衆が判断停止に陥る心配はない。比較してみれば、長所と短所は互いに明快である。用途によって使用に適する尺度が異なるのは認めても、グランドスケールとしては私の提案する尺度のほうがはるかにまさっている、と私は思う。

<http://www.sciencehouse.jp/etc/kenkyu050313.pdf>

発表が進むにつれて、聴衆の顔が生き生きとしてくるのが見えた。私が話し始めるまでは、うつむき加減で堅い表情だった皆さんの顔が、納得と興味で上目遣いになりやや紅潮さえして見えてくる。発表者冥利というものがあるとなれば、こういうものだろう。

会場からは、私が発表したセッションの中では最多の3名の質問があった。質問とそれに対する私の回答の概略を示す。次のステップへの栄養となる良い質疑応答だった。

1-1)Aさんの質問

2つ質問します。

1つ目、「中国語と日本語などのような異なる言語間で比較は可能か」

2つ目。「韓国と日本では、語彙に類似性は少ないのに文法は似ている。文法の類似性は測れるか」

1-2)Aさんの質問に対する私の回答

1つ目について、アルファベットなどで、表音表記すればこの尺度が使用できるが、言語の類似性を見るためには、各民族ごとに歴史的な転音（日本の古代の *oe* が後の *o* と *e* に分化したり、*pa->fa->ha* のような変化したりする。ラテン語の *e* が英語では *s* に変化するなど）を経ているので、言語学的な類似性を測るとすれば、転音シソーラスを用意するなどの工夫が必要と思われます。この方面の研究を希望される方にはご協力します。

2つ目について、朝鮮半島と日本列島は、古代のある時期、朝鮮海峡をはさんで作られた海洋貿易国家（連合国家）を形成したと推定されます。この連合国家の支配階級は、もともと朝鮮半島にした先住民族（先韓民族）と日本列島にいた先住民族（縄文人）を征服して国家連合を形成した異民族であったと推定されます。支配者となった民族の文法は半島と列島にそれぞれ引き継がれ、語彙は半島と列島それぞれの被征服民族（先韓民族と縄文人）のものが使用されるようになったと言う事情を考慮すれば、文法は似ていて語彙が異なるという事実をよく説明します。私の尺度は文字面の類似性に着目しているので、文法の類似性を図ることができません。出来るのはいわば語彙の類似性または独立性を測るだけです。A先生にアイデアがありましたら、この方面にも研究を広げたいと思います。

2-1)Bさんの質問

「ホームページのスクリーニングやスパムの防御には使えないか」

2-2)Bさんの質問にたいする回答

よく考えたことはありませんので、断定はできませんが、発信人のアドレスやドメイン名がいろいろに変えられていても、文面はほとんど同じものがありますから、これを検出する可能性はあります。よく考えてみたいと思います。

3-1)Cさんの質問

「スピードはどうでしょうか」

3-2)Cさんの質問にたいする回答

現在は手計算ですから、トテモ遅いです。(爆笑) プログラム化して速くなるかといえば、それでも遅いでしょう。(笑) テキストサーチの高速アルゴリズムはいろいろな提案があり、かなり速いものがありますが、荒くても速く一致

する文字列（100%類似の文字列だけ）を見つけるといような、いわば近似解を求めるのがこの研究の目的ではありません。100%未満のわずかな類似性までをも含めて数値化して計測値を一意に導くような、社会的コンセンサスが取れる「グランドスケール」を確立することを目的にしていますので処理速度は目的ではありません。

琵琶

(3) 研究発表-技術史教育学会

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyosei log/2005/06/post_ffd8.html

2005/06/04

研究発表-技術史教育学会--感性的研究生活(3)

今日は、何も無い休日、心うきうきとばかり、早朝愛犬の散歩をして、C大学のK教授(現学長補佐)からの久しぶりのメールに、いそいそと返事を書いて、そろそろ仕事仲間のF氏と打ち合わせを兼ねた昼食の約束のために外出しようと身支度を始めたころ、自宅のクロ電話が悲鳴を上げるように鳴った。

家内が電話口に出る、私は耳をそばだてる。--ご隠居のN先生からの電話だ。妻があわてて、私に取りつく。N先生はもっとあわてていた。「今日の発表は、あ、あ、。あと10分でI先生の番ですよ」、、「I先生・・・」とは私のことだ。N先生はめったなことでは私を「I先生」などとは言わない。「Iさん」である。れれれっ、何事か?、と身構えながら、考えた。「技術史教育学会は来週でしたよね」と私。「もう、始まっています」とN先生。わっ、たいへん、1週間、私がスケジュールを勘違いしていたらしい。N先生と私が連名で2本の発表がある。私が先に発表して、続いてN先生の番の予定だ。「じゃ、私が先に発表しますから、あとで駆けつけてください」とN先生。えっ、と言ったって、上智大学の会場までは我が家からたっぶり1時間半はかかる。ままよ、午前の部の最後が11時半ころの開始だったはず、この時間までに間に合えば何とかかなるだろうと私は思った。

演題は「日本語プログラミング言語:約20年の歴史と今後」である。発表資料は、次のURLに掲示されている。

<http://www.sciencehouse.jp/etc/20050604jpphistory.pdf>

自宅のパソコンに向かって、発表資料をネットにアップする、妻にFさんへの断りの電話を頼む、移動用のノートパソコンを取り出して小脇に抱える、免許証をポケットに投げ入れる、玄関を走り出る、車に飛び乗る、、、"待てよ、このまま車で会場に駆けつけるのは危険だぞ、今日は道路の混雑はどうか、所要時間はどのくらいか、都内に出るまでの道路の混雑が心配だ、、、むむっ、調べている時間はない、ええい、最寄の駅で電車に乗り継ごう"と、ハンドルを握り、鉄塔道路へと右折しながら考える。電車に飛び乗る。"駅から歩く時間を考慮すると時間が足りないかも知れない、、、駅構内の歩く時間も馬鹿にはならんぞ、、、乗り換え時間もある、、よし、都内に入れば道路はすいているだろう。御茶ノ水の駅からはタクシーだ"、、、電車の中でも気が気ではない。タクシーが上智大学の正門に到着、、、見渡しても学会の案内看板がない、、、守衛室に駆け寄る、、、尋ねると、指差して建物を教えてくれた。やや重く感ずるノートパソコンを小脇に小走りに会場に向かう。3階までは階段である。走って上る。廊下に出て、左右を見るとかなたに受付らしい人影がある。よかった、、、駆け寄ると中年の男性が立ち上がる。間違いない。「あの、、、発表者の者ですが」と私。「あっ、Iさんですね」と男性。男性は、すぐに入りに向かって走る。走りながら、私に中に入れと促す。男性は入り口から、会場内に向かって「Iさんが到着です」と叫ぶ。私の顔が火のように熱い。真っ赤に違いないが、室内は暗幕が下りていて暗いので見えやしないだろう。午前の部の最後の演者の講演がちょうど終わった瞬間のようだった。まだその演者は壇上に残っていて、ノートパソコンの後始末をしていた。ままよ、ここまで来て、あわててなるものか、居直って発表しようと腹をくくる。

まず、私がマイクを握って「遅くなって、ご迷惑をおかけしました」と謝罪すると不思議と心が落ち着いた。会場は好意的だった。ネットから資料ファイルをダウンロードし、パワーポイントを開くまでにやや時間が経過した。いつものように話し始めた。「私はSE・プログラマの一兵卒として20数年を過ごしてきました」と手短かに自己紹介すると、会場はシンとなる。皆さんが聞き耳を立てていることがひしひしと伝わってくる。大学人、それも定年前後の大先生が多いこの学会では、民間人の発表は目新しいに違いない。ウケを狙って自己紹介したわけではなかったが、かなりの衝撃だったようだ。

淡々と発表が進む。私の前に発表したN先生のお話がよかったのかも知れない。どの研究会で発表するよりも会場の人々の視線が熱い。しかし、残り5分を知らせるベルはまもなく鳴ってしまう。おそらく、前の演者が私の到着を待って、講演を引き伸ばしていたのかも知れない。その分、私の発表時間は圧縮された

のだろう。話をはしより気味に進める。何とか、最後のベルの前にはお話を終える。ベルを少し待っていてくれたのかも知れない。質疑が始まると、たちまちたくさんの手が挙がる。はじめはトロンプロジェクトの質問だった。「日本語プログラミング言語の冬の時代はトロンプロジェクト受難の時代に当たる」という私の話に関連するものだった。私もトロンプロジェクトの末端にいて、プロジェクト崩壊の悲劇をまともにかぶったので、その事情を目の当たりにしていた。その後のトロンの雄伏の期間と最近の再興という流れもよく承知している。日本語プログラミング言語の発展と低迷の波の形はまったく同じであることを説明しつつ、トロンへの期待も語った。あとの質問はよく覚えていないが、私の発表に対する好意的なものばかりが続いた。なおも質問者が続くなかで司会がこれを制して終了を宣言した。

夜開かれた懇親会（立食パーティ）でも、私はちょっとした人気者だった。会長や事務局長を取り巻く渦は当然として、なぜか私の周りにも小さな渦が最後まで続いた。遅刻したことが、かえって注目度を高めたのかな、などと不遜なことも考えながら、帰途に着いた。

琵琶

（４）講演すると気持ちいい、 「成功する WEB 店長の条件」

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/06/web_c9ea.html

2005/06/17

講演すると気持ちいい、「成功する WEB 店長の条件」--感性的研究生活（４）

日本教育会館 7 階で、CMP ジャパン (<http://www.cmpjapan.com/>) が開催した「特別講演！」セミナーが開かれた。私も講師（3 名の内の一人）である。このセミナーは健康食品の WEB ショップの運営に関わる人々向けのものだった。

http://www.kenko-media.com/seminar_info/detail.cgi?article_id=284&media_id=seminar

<http://www.cmpjapan.com/>

私の演題は「成功する WEB 店長の条件」である。講演内容は、下記に掲載されている。

<http://www.sciencehouse.jp/etc/kenkyu.html>

<http://www.sciencehouse.jp/etc/20050613seikouweb.pdf>

参加者はお酒の S 社、醸造業の K 社など 50 社ほどが集まった。社長や担当部長もいる。私の話の間中、熱心に鉛筆を走らせている人が多かった。

半分は、すでに実績のある会社のように、残り半分ははじめたばかりかこれから取り組もうという会社らしかった。大手企業の担当者や実績のある健康食品企業の担当者は、しきりに納得したという顔をしていたが、お金儲けセミナーと勘違いしてきたらしい数名は納得が行かないようだった。

・ネットにショップを作ったら、機械任せにしてザクザクお金が入ってくるのでは、・・・。

（この人はきっと商売で失敗するだろう。市場競争と言うものを理解していない）

・グーグルなどの検索サイトで自分のサイトが上位に出てくるようにするずるい手はないか・・・。

（SEO の王道は良しとして、ずるい方法でもうけられるとすればお縄頂戴しかない）

・結局、値引き競争しかない、...

（おいおい、私の話を聞いていたのか）

これらの例外的な勘違い聴衆を除くと、私の講演はかなり印象深い話と映ったようだ。鉛筆を走らせる音が聴衆の関心の所在を私に伝えてくる。-鉛筆の音がひととき大きくなった話題は次のようなところである。

・日本における食品全体の売上は 1999 年を境に下落に転じている。

・食品のネット販売は逆に増加している。

・新規参入者が多く、過当競争になっている。

・ネットビジネスは、国内で 1 業種 1 社しか生き残れない。

・値引き競争、設備投資競争、サービス競争、、すぐにパワーゲーム化する。

・生き残りのためには差別化戦略と説明能力の強化しかない。

・差別化戦略には・・・などなどがある。

・ウイルス以外にスパイウェアやボットなど多数のマルウェアが登場している。

・社員別の機密保持契約が必要である。

・セキュリティのための労働協約が必要である。

・配送コストがネットショップでは最大のコストとなる。

・法的規制のため、販売に当たって「健康食品の効果」を謳うことは出来ない。

・「健康食品の効果」を本に書かせたり、お金を払ってウェブに掲載させるのは

違法になる。

・「健康食品の効果」は、学会の論文データベースやマスコミの客観報道にリンクして示せ。

・値引き競争に巻き込まれるな。値引きよりもオマケ。

・価格で勝てない商品からは撤退しよう。勝てる商品だけで勝負をかけよう。

聴衆は興奮気味に聞き入って、講演が終わるとバラバラと私に駆け寄る人たちが多かった。勘違いの人もいたが、多くは的を射た質問だった。

たまには、実務に関連した講演もいいものだと感じた。

琵琶

(5) 組織破断限界シミュレーションの試み

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyosei log/2005/12/x_3eb6.html

2005/12/10

組織破断限界シミュレーションの試み--感性的研究生活(5)

これまでも、研究発表にまつわる話題をここには書いてきた。

改めて、振り返るといろいろあった。

これからは、シリーズとして扱うことにする。過去の記事も、適宜整理してシリーズ番号の下に統合してみたい。

12/10(土)「第49回 SH 情報文化研究会」が開かれた。阪井教授のお計らいのおかげで、SH 情報文化研究会と明治大学情報科学センターの共催の形となった。メインテーマが「組織と情報」で、主たる発表者は、阪井和男様(明治大学教授)と栗山健様(学研編集部)、そして私である。

<http://www.sciencehouse.jp/materials/studyrec.pdf>

http://groups.yahoo.co.jp/group/SH_Academy/

<http://www.meiji.ac.jp/isc/>

思いもかけない人々が集まって、最近にない盛況となった。

阪井教授は「組織変革におけるブルーオーシャン戦略」、栗山様は「良い組織・悪い組織」を語った。

私は、「組織破断限界シミュレーションの試み--メンタルパワーモデルの提案」

を語った。

最後に、阪井和男（明治大学教授）と栗山健（学研編集部）そして私が壇上に上がって、「組織と情報」について、鼎談風に意見の交換を試みた。時間はあっという間に過ぎて、近くのレストランで忘年会になった。

企業戦略で言えば、阪井教授と栗山様は、「前方戦略」のイノベーションを語り、私は組織戦略を語ったことになる。鼎談の中で、それぞれの分野の違いを明らかにして、論点を整理した。

私の発表は、組織の運動法則を数値モデルから導こうというもので、開放系の熱力学のアナロジーを用いたものである。組織率とメンタルパワーを指数関数的対応関係とみなしたモデルで、私としてはなかなか気に入っている。今年の春に発表した文字列類似度も「類似性」という感性的量を数値化するという試みだった。この分野は、私のもっとも得意とするところである。「感性工学」（http://www.jske.org/main_jp.html）と呼ばれる学問領域があるが、これとよく似た分野であると思っている。組織率とメンタルパワーを指数関数的対応関係とみなすと、いろいろなことがわかってくる。ある初期値にある組織率が時間とともに変動する様子を追って、無限時間後の局所的安定領域を求めてみると、次のようなことがわかってくる。

- 1) thought leader の能力のいかんによらず、初期少数派は消滅する。
- 2) 有能な thought leader のもとでは、志の高い集団（初期多数派）は発展する。
- 3) thought leader の能力が及ばなければ、志の高い集団（初期多数派）といえども消滅する。
- 4) 志は高いが thought leader のいない集団は破綻する。
- 5) 対案なき抵抗勢力（初期多数派）ははびこる。
- 6) 鎖国政策は成功する可能性有り。

thought leader とは、次々に理念に新しい価値を付加し続ける存在で、ありきたりの意見に固執するオピニオンリーダーとは区別した。

心理的な最短距離を突き進もうとすると組織が分裂することも明示された。心理的最短距離と、リアルな最短距離は異なるパスである。曲面幾何学の写像のような関係になっていることが示された。

春から初夏にかけて、思い立って、たまたま座れた電車の中でノートを広げて試算すると、とんでもなく感動的な結果が出てくるらしいことに気がついた。何度も計算をやり直して間違いのないことを確かめた。それから、発表のチャンスを狙っていたのだが、無名で権威のない私に、それほど頻繁に発表の機会

はない。人の行動と情報と心理は、人の感性の部分で固く結びついている。わが感性を信じて数値化したら、ドンぴしゃりであった。

これまでも組織論については経営や教育の観点からこのブログにも書いた。

組織を活かす力、改革する力--社長の条件(6)

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/07/6_b544.html

学生は変わったか--心理、教育、社会性の発達(1)

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/07/post_e5f7.html

戦略的情報組織学(再論)--社長の条件(8)

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/8_600d.html

しかし、「局所的安定領域」という部分にスポットライトを当てるのは、この発表が最初である。

いつか、もう少しメジャーなところでも発表して、多くの人の批判を受けてみたいと思う。

12/10の発表資料は、「スタッフによる主な研究発表と講演」で公表されている。

<http://www.sciencehouse.jp/etc/kenkyu.html>

<http://www.sciencehouse.jp/etc/20051210soshikihadan.pdf>

琵琶

(6)一人にしない教育者と、一人にしない教育を

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2006/01/6_c2b8.html

2006/1/26

一人にしない教育者と、一人にしない教育を--感性的研究生活(6)

この日、第4回次世代大学教育研究会(会長大阪経済大学家本教授、事務局長明治大学阪井教授)が開かれた。昨年夏に約束した私の発表の日である。

発表のタイトルは「一人にしない教育者と、一人にしない教育を」であった。

「社会性の発達が阻害された青年が多くなっていること」と「知性なき丸暗記」とは、大学教育における双子の困難である、と私は述べた。その対策のいくつかも提言した。

ほとんどが、このブログに書いてきたことのまとめでもある。

[「出された課題に正解が書いてない」](#)

[広範な社会性の発達阻害、サイコパス化する若者の脳](#)

[「急増する小学生の教師への暴力」](#)

[「教師の本音」](#)

[「昔あった"教育心理学の不毛性"の議論」](#)

[「教職課程用"教育心理学"のテキストの調査」](#)

[「超える努力」](#)

[「気がつけば全般的学習困難と学習障害」](#)

[「社会の構造」](#)

[「個性と社会性」](#)

[「記憶の社会性」](#)

[「多すぎる、社会性の発達阻害の原因」](#)

[「"一人にしない" 情報コミュニケーションシステム」](#)

私のこの発表では、特に、多くの大学の教職課程で教えられている「教育心理学」に「社会性の発達」が含まれていないことを強く指摘した。これを乗り越えようとする試みも散見されるが、まだマイナーの域を出ていないことも指摘した。質疑の多くもここに集中し、問題点についての認識を参加者の多くが共有することができたようである。

大学でできる解決のための方策として、私が取り上げたものは次のとおりである。

-
- (1) 協調学習（大学）
 - (2) キャンパスメイト制の採用
 - (3) 学生生活何でも相談制度
 - (4) 教職課程の改善
 - (5) ニート再教育
 - (6) 小中高教員の再教育
 - (7) 大学教員の教授法研修

すべては、「一人にしない教育」のために
教育のシステム化も「一人にしない教育」のために

「(3) 学生生活何でも相談制度」のくだりでは、勝手ながら[千葉大学の岩淵桂子女史の活躍](#)を例に取り上げた。女史には、私の会社で社員だったこともあるご縁がある。女史は千葉大で修士を取って、当社在社中に東大の博士課程に進学が決まり、博士号を取った後、国立の研究所で長く研究員をしていた。昨年からは古巣の千葉大で「教えて大先輩」の人気カウンセラになっている。一人40分ほどの持ち時間のはずだったが、質疑が続いて、私のコマだけで、1時間20分ほど費やしてしまった。どなたも取り上げなかった問題の核心に的中

した手ごたえをあらためて感じた。

私以外には、大岩幸太郎（大分大学教育福祉科学部）教授が「Web 上での掲示板システム『sanka』を用いた授業実践」を話され、阪井和男（明治大学情報明治大学情報科学センター所長）が「次世代大学教育の大学間連携」のお話をされた。どちらもエキサイティングな内容だった。

大岩先生は、講演中にたびたび私の話を引用されて「この仕組みも、"一人にしないシステム"を目指している」と述べられて、私にお気遣いと配慮を深く示してくださった。

いつもの懇親会には、阪井教授のお嬢さんも参加された。未成年なのでウーロン茶でのご参加である。自発的な関心なのかお父様にそそのかされた(?)のか、判然とはしない部分もあったが、学校教育の問題点および学習障害（LD）や多動性注意欠格障害（ADHD）、アスペルガー症候群（軽度の自閉症スペクトラム）などに触れた私の話に関心をもたれたようで、真剣で熱心な質問を受けた。後日、私の大学の授業にも聴講にいらっしゃる由。男子学生が聞いたら大喜びするかも知れない。

私だけ、懇親会を早めに抜け出して、大阪に向かった。大阪では「未病システム学会」が今日から始まっている。この記事については、稿を改める。

この発表の資料は、[次世代大学教育研究会のブリーフケース](#)にも収録される予定であり、WEB-Masterさん次第であるが[私の会社のホームページ](#)にも掲載される見込みである。

琵琶

(7)エビデンスに基づく漢方医療へ

<http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2006/01/7 dbc2.html>

2006/1/28

エビデンスに基づく漢方医療へ--感性的研究生活(7)

1月27日-28日は、未病システム学会（理事長 大内尉義 東京大学大学院医学系研究科加齢医学講座教授）の第12回日本未病システム学術総会（学会長 木

戸口公一（大阪府母子保健総合医療センター・企画調査部長）が開かれた。ここでは、千葉大学の漢方診療所の喜多所長が発表する。この研究ではクラスター分析などのデータマイニングは私が担当したので、質問がデータマイニングに及んだ場合などに備えての支援を要請されたのである。

前日、[私は別の研究会で発表していたので](#)、20時13分発の新幹線で大阪に向かった。妻とは東京駅で合流した。妻は私の健康状態を気遣ったのである。宿には24時近くにチェックインした。

28日の朝、大阪城の敷地の南のはずれに立つKKRホテルオオサカに行く。3階の受付近くで待つと、喜多先生が薬剤師の大野先生を伴って登場した。大野先生は、最近、千葉大の漢方診療所に勤務して、喜多先生のチームに参加することになった。妻は、事前の打ち合わせどおり、会場の様子を見てから、パネル発表の場に残るか、大阪城の見学に行くことにした。私は、非会員の登録を済ませる。登録料7000円+抄録1000円だった。医学系の学会としてはお安いのだろうと思う。

喜多先生と大野先生とともに会長講演を聴く。会長は羽織袴で壇上に上がった。医学系のシンポなどでは羽織袴もときどき見るのでそれほど驚くものではないが、違和感がないかといえれば正直なところないとはいえない。糖尿病を例にして母体の健康状態とその児の成育に与える影響を追った渾身の研究成果をもとに、児の生涯を決定付ける「未病対策」を訴えられていた。医学者ではない私にも分かりやすいお話であった。

会長講演の後、妻の携帯電話に電話をする。すでに大阪城の天守閣にいるという。席に戻るとテーマシンポが始まった。シンポの途中で会場を抜け出して、パネル発表の会場に向かう。喜多先生の発表準備のためである。Bコーナの発表はすでに始まっていた。

B12番が喜多先生の番である。やがて、東京女子医大で行われた国際シンポジウムで遠くからお顔を拝見した鄭（丁）教授の紹介で、喜多先生の発表が開始される。喜多先生は落ち着いている。大丈夫、と左後ろに控えた私が心の中でつぶやく。私は他のギャラリーに混じって、いざというときに前に飛び出せる位置をキープする。喜多先生の研究は、西洋医学の産物である健康状態に関するアンケート（日本語版）SF36v2のクラスター分析と漢方の所見である気血水の診断（寺澤スコア）を重ねて見せるものである。漢方医療は、エビデンスに乏しいというソシリがあり、科学ではないとまで言われることがある。これを西洋医学的エビデンスも援用しながら、漢方医療の正当性を確立したいというのが喜多先生の願いである。その熱意は並々ならぬものがある。私はその熱に感染したらしい。SF36v2のクラスター分析は私の仕事、その結果のそれぞれのクラスターに喜多先生が下した気血水のスコアの平均値を当てはめてゆく。有

意の差が明瞭に現れている。気血水の判定という熟練の医師による判断は、統計学の成果で見事に説明ができたのである。

喜多先生の発表の瞬間、会場には、それまででは一番多いギャラリーが詰め掛けていたようだ。関係者の関心の高さが分かる。会場からは、アンケートに答える患者にはウソが多い、という声ができる。もとより、発表した結果については統計的結果にのみ価値があるのであり、個別のアンケートをこれで判断してはならないという点については、事前に打ち合わせ済みであり、私と喜多先生の基本的スタンスでもあった。パネル発表という制約の狭さを感じた。今後ともこの研究は続くので、後の発表では、これらの点についても明記されることになるだろう。発表が終わって喜多先生は満足の笑みを浮かべられていた。私の出番はなかったが、私もほっとした。

この後には、ランチョンシンポジウム（お弁当付き）があったが、妻が大阪城の見学から帰っていたので、われわれだけ帰ることにした。お弁当にはやや未練が残ったが、・・・。

漢方医療のエビデンスを探るイバラの研究は今始まったばかりである。足手まといにならない範囲で、私も喜多先生についてゆくことにしたい。

この発表の資料は、WEB-Masterさん次第であるが[私の会社のホームページ](#)にも掲載される見込みである。

琵琶

(8) 息子の学会同行

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyosei log/2006/02/2006_1.html

2006/2/27

息子の学会同行--感性的研究生活(8)

2月25日(土)-26日(日)は、情報コミュニケーション学会の第3回大会が開かれた。

山本恒大会委員長(園田学園女子大学情報コミュニケーション学科長)の基調講演を聴くために、25日の朝9時に自宅を出発した。今回は発表がハードなので、息子に介添えを頼んだ。荷物もちである。新横浜で、跡見学園女子大学で

情報系の講師をしている SH 情報文化研究会の仲間の Y 先生と合流し、新大阪に向かう。

息子は、はじめ遠出を嫌がっていたが、ノートパソコンを持ってゆかなければならないという事態に気づいてからは、積極的に準備などをしていった。

私の発表は、単独 2 件、Y 先生との共同発表 2 件である。共同発表は、私と Y 先生が一つずつ筆頭になっているので、私が壇上に立つ発表は合計 3 件、Y 先生は 1 件である。

基調講演の会場入り口で学会長の阪井和男先生（明治大学教授）とばったり出くわす。挨拶を交わして、息子を紹介する。「お父さんとは違って、まじめそうな息子さんですね」といつもながらもおチャラケをいう阪井先生だった。基調講演は、息子にも分かりやすかったようで、熱心にメモを取っていた。基調講演を聞き終えると懇親会である。息子はむくれている。「場違いなところにつれてきた」というのである。「ボクをおいて、あちこち場内を歩き回るんでしょ」と警戒心いっぱいである。「ここにいる間は、傍にいるから」と私。「何をしたいらばいいの」と息子。「お父さんと話をしたいらばいい」と私。これでやっと息子も納得。懇親会でいろいろな人と名刺交換しておきたいところだったが、すっかりあきらめた。山本恒大会委員長がたまたま傍に立っていたのでご挨拶する。和田格明治大学講師も近くに寄っていらっしやだったので、会話を交わす。息子は緊張してせっかくの料理にあまり手を出さない。和田先生にビールを注がれて普段は飲まない息子もビールをコップ 1 杯を空ける。和田先生と私の会話の合間を縫って息子は盛んに基調講演の話題で私を質問攻めにする。お話が面白かったと見える。和田先生が、会の途中で、そのまま新幹線に乗って帰るとおっしゃって退席される気配を見せたのを機会に、われわれ親子も退席することにした。私の発表は翌日に予定されているので、早めの退散はありがたい。帰りがけに、阪井会長に挨拶する。

宿は、初めてとまるビジネスホテルである。キャンペーン中のヤフーで見つけた格安ホテルだったので、分けありかなと心配していたが、普通のビジネスホテルだった。やや古いが、隣の部屋の声が聞こえるようなことはなかった。ベッドサイドで私は明日の予習をして、就寝。夜中の 1 時ころ急に目が覚めた。なぜか、1 つだけ説明の方法を変えたくなった。多分、夢の中で考えたためだろう。修正を終えたらばったりと再度寝入ってしまった。この修正については、次の記事で触れるだろう。夜中に息子が風呂に入ったようで薄目を開けたが、眠かったのでそのまま寝続けた。

安宿なので、朝食がついていない。朝、7 時過ぎにホテルを出ることにした。フロントで、近くに朝食が取れる場所がないかとたずねる。駅の近くに行けば何かあるのでは、と頼りない回答だった。商店街を抜けて駅間近かにミスター

ドーナツを見つけた。こうなると息子の天下である。「飲茶セットがいいよ」と、自信たっぷりである。私は中華粥と点心のセット、息子は中華粥とハニーオールドファッションドーナツである。息子はジュース。私はコーヒー。時間がたっぷりあったので、息子はさらにドーナツを2つほど追加した。前日の懇親会であまり食べなかった穴埋めのようなではあった。息子は当日発表する私の研究内容を一つ一つたずねる。私もそれに答えて説明する。話し飽きて、駅に入り、電車に乗り、会場最寄の駅に着く。まだ早い、このまま会場に到着すると会場が開いていないかも知れないと息子と言い合って、駅前の喫茶店で30分ほど時間をつぶしてゆこうということになった。東京ではもう見ないようなクラシックな喫茶店がある。二人でミルクティーを注文して、おしゃべりする。もっぱら研究発表の内容についてである。息子とこんなに話したのは久しぶりだ。仕事の話ではこうは行かない。研究の話ならば、やや浮世ばなれしているので良いのだろう。8時50分、やっと腰を上げて会場に向かうことにした。私の最初の発表は、9時半スタート、この日の最初の講演である。

私たちは4件ともに大会の一般研究にエントリーしたのだが、一般研究は4つの会場に分かれて行われる。私の発表のはじめの2件は、通常は「メディア演習室」として使われている4階の教室が会場である。Y先生が担当する3番目の発表は、3階の大会議室、4番目の発表は4階の別の教室「基礎情報演習室」である。会場の移動がある上に、Y先生と私の発表時間が各会場毎の進捗いかんによって、重なる危険もあるので、Y先生の発表を私が聞けるかどうかは微妙なところである。

発表については、項を改めて書くことにする。

琵琶

(9) 田子の浦ゆ打ちいてでみれば

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2006/02/9_fd5b.html

2006/2/27

田子の浦ゆ打ちいてでみれば--感性的研究生生活(9)

26日(日)の最初の発表は、「文字の出現確率に基づく第2類の文字列類似度」である。

文献：琵琶、「文字の出現確率に基づく第2類の文字列類似度」、情報コミュニケーション学会第3回全国大会発表論文集、pp.37-38(2006)

[昨年\(2005年3月\)の情報コミュニケーション学会で発表した文字列類似度](#)からの発展研究である。[昨年発表した文字列類似度の計算法](#)は、今回の計算法と区別するために「第1類の文字列類似度」と言うことにした。

第1類は、比較対象空間上にある文字列はすべてランダムテキストであるという仮定で計算式が成立していた。類似度というものの考え方をはじめて導入することになるので、複雑な様相を呈する現実の文字の存在様式を隠す必要があったためである。昨年時点で、実は、第2類、第3類の構想はでき上がっていた。第2類、第3類の計算式としては完成していなかったし、サンプルの計算も間に合っていなかった。しかし、あえて、それらの構想については触れなかった。今回は、第2類の計算式を確定し、サンプル計算も仕上げ、発表に臨んだ。第2類は文字の確率を比較対象空間上にある現実文字の出現確率を基に計算をするのである。

第1類も第2類も、比較するテキストに共通して含まれる文字列のフラグメント(キーテキスト)に注目する。存在確率の低い(レアな)キーテキストが多数含まれていれば、類似性は高いとみなすのである。Leveshteine 距離とはそもそも考え方が異なっている。昨年発表した第1類でも、ネット上では熱い関心を集め、私の氏名を冠して応用が広がっていることが良く分かる。第2類もネット上に公開するので、我が文字列類似度の尺度はいつそう普及してゆくことになるだろう。

今回の発表の見せ場は、2つあった。

一つは、test と street がどの程度似ているかということである。第1類では、ある対象空間では類似度が25%であった。昨年の会場からは、計算上そうなるというのは分かるが、自分の「主観的な感じ」ではもっと類似性が高いような気がするという質問者の声があった。ごもつともである。第1類では、ランダムテキストなのだから、、、。言わなかったが、文字について現実の出現確率を採用すれば、もっと生身の「感性」に近い数字が出るだろうというのが、私の胸中の呟きだった。まさしく、今年(今回の大会)は、その結果を示すことができた。同じ対象空間で第2類の計算をすると test と street の類似度は86%となった。他のサンプルは計算式をことにするのだから当然異なる数字をはじめ出してはいるものの、傾向は良く似ていた。

もう一つの見せ場は、本歌取りの歌が本歌とどの程度類似性があるかを示すところだった。用意したサンプルは次の2つの歌である。

「田子の浦ゆ 打ち出でて見れば 真白にそ 富士の高嶺に 雪は降りける」
(万葉集、本歌)

「田子の浦に 打ち出でて見れば 白妙の 富士の高嶺に 雪は降りつつ (新古今、本歌取り)

この2つの歌の類似度を見せるのは、講演の最後の一場面になる。前日、夜半の1時ころ目が覚めたのはこの部分である。パワーポイントの最後に近いところにこの部分がある。しかし、突然、冒頭で、予告しておいたほうが良いと強く思ったのである。いつ思ったのか、というと定かではない。多分、ベッドサイドで予習して、寝入ったときまでは、そんなことは思ってもいなかった。1時ころハッと目が覚めたときには、どうしてもトップページで予告しなければと思い込んでいた。おそらく、私は、寝ている間に、考えていたのだ。パワーポイントにすばやく1ページを加えると、私はなぜかとても安心した気持ちになって、すぐにまた寝入ったのである。

この修正は、たいへん良かった。聴衆は、まず最初のこの予告で視線が釘付けになった。やや難しい数式の説明にも耐えて、寝てしまう人もいなかった。最後に近づいて、また2つの歌が登場し、計算の結果、類似性は第1類によれば71%、第2類によれば78%になったと説明すると、ほほを紅潮させている人たちの視線が私に集まるのを感じた。

とりもなおさず、私の発表は成功だった。会場からの質問はややピントがずれていたりしたが、好意的だった。

この講演のあと、ロボットを使用した実験の報告が2件続いて、また私の発表の番がやってきた。私にとっては2本目、この会場では本日通産4番目の発表である。この発表については、再び項を改めることにする。

琵琶

(10) 志の低い集団は物も言わずに生き残る

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyosei log/2006/02/10_25e1.html

2006/2/28

志の低い集団は物も言わずに生き残る--感性的研究生生活(10)

26日(日)の2つ目の発表は、「メンタルパワーモデルによる組織の局所安定化領域」である。

文献: 琵琶、「メンタルパワーモデルによる組織の局所安定化領域」、情報コ

コミュニケーション学会第3回全国大会発表論文集、pp.43-44 (2006)

この発表内容は、[第49回SH情報文化研究会で発表した内容](#)を基にしたもので、SH情報文化研究会では「[組織の破断](#)」に焦点をあわせたが、今回は、「組織の安定化領域」に焦点をあわせたものである。

開放系の熱力学の熱量に習って、組織のメンタルパワーという量を導入する。組織率とメンタルパワーの間には、一定の関係があることを大胆に仮定するというあたりが、このモデルの勘所である。一次微分連立方程式が成立するので、組織率について解を求めると、時間に関する指数関数を平方根の中に含む形になる。環境と集団の温度差（志の高さの差）や初期組織率によってその様子が異なるが、時間を経過すると組織率が変化する。その最終的な結果をグラフにしてプロジェクトに映し出す。

このグラフによれば、志が環境より低い集団は、初期に過半数を占めているとそのまま組織率を増やしてゆき、最終的に全員を志の低い仲間集団にしてしまう事が鮮明に示された。悪貨は良貨を駆逐するのである。あれほど批判を浴びながら自助努力によっては変化しない某庁や某公団はどうだろう。自己の正当性を主張することもなく、ただ頭を低くしていればいずれ嵐は去るとでも考えているのだろうか。放置されれば、これらの組織は変革されることなく生き残りその組織の中の志の低い集団は志の高い人物を殲滅しつくすことが法則として導き出される。聴衆は、身を乗り出して聴いている。犯罪集団や不良グループも、彼らだけの集団でいる限り、安泰である。善良な多数の市民の前に引き出され十分にさらされると解体するのだが。某庁や某公団は大きすぎてしかもまだ大衆の前に十分にさらされきれていないのである。抵抗勢力は、物を言わないほうが生き残れるのである。実際、抵抗勢力は、物も言わずに生き残っている。

外界との情報の交流を断つと、初期の組織率はそのまま維持される。つまり、鎖国政策は成功するという可能性も示される。徳川幕府の例もあるが、海の向こうの半島の北側の国も鎖国政策によって体制を維持していることを説明すると会場にはうなづく者がいる。

志が周囲より高いと、初期に多数を占めていてもいなくとも、通常は半数に収斂した後、破綻する。数式の上では、複素数の世界に突入する。正直者の口バは疲弊し、良貨は悪貨によって駆逐される、ことがはっきりしている。

それでは、いつまでも志の高い者は報われないのだろうか。そんな、馬鹿なことはあるまい。

そこで、集団の中に thought leader がいて、絶え間なく知恵を供給していたり、メンバー全員が学習を怠りなく知恵を生み出す場合を想定してみた。この場合は、メンタルパワーがその集団の中から普段に湧き出しているという想定が成

り立つ。湧出量の項をメンタルパワーの式に加えると、似たようなグラフが出来上がる。少し違うのは、志の高い集団にも、わずかに生存領域が見えてくるのである。その領域はいかにも狭い。メンタルパワーが強ければやや広がるが、いかにも危うい。・・・大学も大競争時代に突入しており、生き残りを掛けた努力が必要な時代になった、生き残れる大学はその内部で常に新しい知恵を生み出す能力がなければならないという意味を示しているようだ、と述べると、会場はざわめいた。

最後にメンタルパワー空間での組織破断の例を示し、これを避けるリーダーの行動にも触れた。「私も年を取ってだいぶタヌキになったが、・・・」と前置きして、タヌキの社長はどのように社内を誘導するかと説明すると、会場にはニコニコ顔が広がった。

質問の時間、いくつかの有意義な質疑があった。

1)鎖国政策の時代、施政者たちだけは海外との交流に怠りなく、外部の情報によってその知恵を強化し、そのことによって支配を万全なものにしていったという指摘があった。なるほどそのとおりだ。このモデルでも、庶民レベルの情報は外界と遮断した上で、施政者のメンタルパワーだけ強化していれば、その体制はもっと安定である。さらに情報遮断をどんなに政策として厳密に実施しても少しはもれ伝わるものである。特にインターネット時代の現代では、防ぎようもなくなりつつあるに違いない。そのモレの部分を生政者によるメンタルパワーの注入という形で補うのは十分考えられることである。

2)停滞した組織の場合2つとか3つとかに分解して競争させると活性化されると言われてよくそのような政策が取られるが、それはどうか、という質問があった。私の回答は、効果は乏しいというものである。私の研究ではないが、アメリカの研究で、組織内に良質の別組織を作ったり、良質の人材を集めた別会社を同じ敷地内に作ったりした場合にどうなったかというものがかなり存在している。志の低い集団が傍にいと彼らとの交流が続くので、やはり悪貨は良貨を駆逐してしまうのである。失敗してしまうということである。成功した事例は、いずれも遠く離して情報交換もままならないようにした場合や、資本も別で、完全な競合を実現できた場合に限られているのである。このような説明をした。実は、私は、今回のモデルで、たとえ分割して競争させようとしても志の低い集団が2つ3つできる限りは、互いにがんばらない競争（「サボタージュこそ偉い」?!）をし、足の引っ張りあい終始するだろう事は目に見えているのである。お勧めできないのは言うまでもない。

この分野は、もっと応用的な発展が可能であろう。共同研究をしていただける方はいないものであろうかと思うのである。

さて、この発表が終わると、11時少し前になっていた。11時半からは私たちの

3 つ目の発表が大会議室で行われる予定である。この発表の担当は Y 先生。12 時から、私が発表を担当するのは 4 つ目がある。4 つ目の予定の基礎情報演習室に荷物を持って、私と息子は移動する。ちょうど座長の西端先生のお話が始まるころだった。わかりやすくもためになるお話を聞く。次の発表が始まる前に、Y 先生の発表の冒頭だけでも聞こうとあわただしく階段を駆け下りる。部屋に入ると、まだ、その前の発表者が壇上にいた。前から発表が押しているらしい。待っていると、12 時 5 分前になってしまった。やっ、やっ、12 時から私の担当分が始まる!!!。大慌てで、今度は階段を駆け上がる。会場に到着すると、まだ前の演者がお話をしていた。息子は私を追ってこないで、Y 先生の講演を聴くつもりのようだ。Y 先生のお話は、セキュリティがテーマである。息子の関心事であることは間違いない。私は、深呼吸すると、自分のノートパソコンに電源を入れて、スタンバイをする。この続きは項を改めて、書くことにする。

琵琶

(11) 情報コミュニケーションの社会性="影響関係"

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyosei/log/2006/03/11_e17a.html

2006/03/01

情報コミュニケーションの社会性="影響関係"--感性的研究生活(11)

26 日(日)の 3 つ目の発表は、Y 先生が担当した。それぞれの会場の進行がずれたため、私が担当する 4 つ目の発表と時間が重なってしまったので、私は Y 先生の発表を聞きそびれた。Y 先生の会場に居残った息子から Y 先生の発表の様子は後で聞いた。Y 先生の発表については、この後の記事で紹介する。

ここでは、私が担当した 4 つ目の発表「組織と情報コミュニケーションにおける"影響関係モデル"の提案」について記述する。この研究は、前の 2 つとは違って、Y 先生と私の共同研究である。

文献：琵琶&Y 先生、「組織と情報コミュニケーションにおける"影響関係モデル"の提案」情報コミュニケーション学会第 3 回全国大会発表論文集、pp.89-90 (2006)

この発表内容は、[1 月 26 日に開催された第 4 回次世代大学教育研究会](#) (代表:

家本修大阪経済大学教授、代表幹事：阪井和男明治大学教授)で発表した「[一人にしない教育者と、一人にしない教育を](#)」から"影響関係モデル"だけを取り出して整理したものである。次世代大学教育研究会では「社会性の発達を知らない"教育心理学"」に苛立ちをぶつける発表だったが、今回は、"影響関係"の全体像を詳しく説明し、情報組織論の立場でモデルとして定式化することを試みた。

まず、私は、組織は、定常流的な実在で、"系"の一種である、"系"は要素間の関係が維持されるところに成立する、組織の要素(人、単位組織、メタ組織、ネットワーク)の間関係は、「影響関係」であり、この関係が持続するところに組織や社会が存立するのである、と述べた。「組織」や「社会」についてのモデルについても百花繚乱という状況で、たくさんの意見はある。私が提唱しているモデルを提示し、要素間をつなぐ糸を図で表示した。この糸こそが、「影響関係」であると強調しておいた。

「影響関係」とは、互いに変化させあう関係である。社会や組織は、互いに変化させあう関係すなわち「影響関係」が維持されることによって初めて"系"として存続できる、と述べた。「影響関係」は文字や図、言葉や音楽というような狭義の情報だけで成立しているのではない、それは「影響関係」の半分の側面に過ぎない、という指摘も行った。残り半分は、他の組織の要素(人、単位組織、メタ組織、ネットワーク)に対する物理的強制力(身体的影響関係)である。多数決、逮捕、解任、昇格、権限付与、軍事力の行使などがこの半分に含まれる。「影響関係」の2つの側面は、独立して他を援用しないことがスマート・マナーではあるが、実際は複合して実行されている。ここを捕らえていないと、間違いが起こると説明した。

某国国営放送が、言論界のパワーポリティクスの優劣だけを誇って、傍若無人の振る舞いを続けた結果、受信料不払い、政治運動を介した国会での非難、予算の削減、規制強化、総務庁からの指導強化というような一連の身体的影響関係のフィードバックを受けているのである。言論は自由なように見えて、実はそうでもない。たとえば、高校生や大学生が「こんなことを言うと仲間はずれにされるかも知れないから、言えない」と言葉にしないことを見て、教師が「もっと言いたいことを言いなさい」と言っても、「仲間はずれにされるかも知れない」という懸念がある限り無理な要求というものである、あるいは、また、たとえば、大学の教員が「理事長に一言ものを言いたい、言うと首になるかも知れない」と首をすくめて大人の配慮をするのも同様の問題である。情報コミュニケーションは、両者のバランスを考慮して行われている事実を認識すべきであることを指摘した。そこで、私は、あえて、言論のみの影響関係を「狭義の情報コミュニケーション」と定義し、身体的影響関係を含む

影響関係を「広義の情報コミュニケーション」と定義した。

さて、今回の学会では、さすがに、情報コミュニケーションを対象への情報の伝播とだけとみなす考えは少なく、情報はメンタル・モデルに到達するという考えが多かったようである。中には、相手の心を変えることであるという点に踏み込んだ発言もあった。山本恒大会委員長（園田学園女子大学情報コミュニケーション学科長）の基調講演では、先人の言葉を引用して、これを教える教育を「情報教育」ならぬ「情能教育」という言葉で説明した。座長もつとめられた西端律子先生（大阪大学）は、「コミュニケーションは相手の何かを変える」「教育を受けるとは変わることであり」という表現で、それとなくこのことに触れた。私は、「影響関係とは、知識と心理、すなわち大脳を変化させることによって行動を変化させたり、身分や権限を変化させる強制力によって行動を変化させることである」と述べた。私のモデルの場合、生ずる変化は相手の脳や心の中にとどまらない。相手の行動の変化にまで及んで、影響関係はその目的を達するとしたのである。その意味で、私の「情報コミュニケーション・モデル」は史上最も過激な定義となったようである。議論としては過激かも知れないが、より包括的で妥当な定義がえられたのではないかと、私は満足である。この発表ができたことは、大変幸せに感じた。

ついでに、こうしてみれば、「情報コミュニケーション力」とは、本来、「"あやかし、催眠、錯覚、洗脳を良くして他人を欺くこと"ではない」ということも明言することができる。公序良俗に従う、すなわち社会の究極目的（人の悠久たるを目指す）にかなう「情報コミュニケーション」だけが教育に値するものである。私のように「情報コミュニケーション」を教育する立場の教員は、周囲から、「情報コミュニケーションなどは教えるべきではない」という非難にさらされる。非難する人たちは、「"情報コミュニケーション"とは、"あやかし、催眠、錯覚、洗脳を良くして他人を欺くこと"」と誤解しているに違いない。誤解を与えている教員がいたら論外だが、少なくとも、まじめな教員には"あやかし、催眠、錯覚、洗脳を良くして他人を欺くこと"などと思っている人はいない、・・・と思うのである。「情報コミュニケーション」とは公序良俗を高め、社会の究極の目的をよりよく実現する人々の絶え間ない営為であると、私は思う。

会場には、阪井和男情報コミュニケーション学会会長（明治大学教授）がじっと聴いていた。質問の時間になると真っ先に手を上げてくれた。私が説明の中で使用した「心、心的、心理的」という言葉の定義を質された。鋭い、・・・。私は思わず謝ってしまった。「すいません。それほど厳密に考えずに使用しました。どちらかといえば、"心理的"というべきと考えます」と回答した。阪井和男は、私よりもお若いですが、最近では常に私の先生役である。座長の西端先生は

「教育（教職課程）に関わっている者ですが、教育との関係では、何か」と促された。私は、一瞬、何を言われているのかわかみかねた。心理学の中では発達心理学に期待していること、2-3 歳児の発達心理ばかりではなく、青年期、成人期、老年期の社会性の発達の研究も期待していること、グループ学習、協調学習に努力中であることを脈絡なく回答した。やや反省。帰宅後、<http://www.sciencehouse.jp/etc/20060127hitorinishinai.pdf>「一人にしない教育者と、一人にしない教育を」の資料の紹介を兼ねて、お詫びとお礼のメールを西端先生にお出しした。

息子は、私の発表が終わりかけた頃、私の会場に戻ってきた。Y 先生の発表が終わったからやって来たのだろう。帰りの新幹線の中で、その様子を聞くことにしようと、そのとき、思った。

Y 先生の発表については、また、項を変えて書くことにする。

琵琶

(12) もっと学生にセキュリティ教育を

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2006/03/12_2994.html

2006/03/01

もっと学生にセキュリティ教育を--感性的研究生生活(12)

26日(日)の3つ目の発表は、私との共同研究ではあるが、Y先生が担当した。私の発表時間とY先生の発表時間が重なってしまったので、私は聞きそびれたが、息子が最初から最後まで聞いた。息子の評によれば、Y先生の発表は終始落ち着いていて、スマートだったということである。Y先生はいつも準備万端で、発表の練習も怠らないのである。やや行き当たりばったりで、乱暴に行動する私とはずいぶん違う。

発表のテーマは、「学生の情報セキュリティ知識欠落の問題点と教育的対応」である。

文献: Y先生&琵琶、「学生の情報セキュリティ知識欠落の問題点と教育的対応」, 情報コミュニケーション学会第3回全国大会発表論文集、pp.73-74(2006)

Y先生はまず、学生アンケートと政府の調査結果などに踏まえて学生を取り巻く環境とネット犯罪の現状を説明した。インターネット・リスクには、マルウ

エア(Malicious Software ; 悪意を持ったプログラム)、不正アクセス、詐欺などがあることを説明する。続いて、学生の知識の現状(アンケート)と通常の大学の対応をかいつまんで説明する。学生や大学関係者は、情報セキュリティに関してはほとんど無知に等しく、現状のままでは犯罪者の格好のターゲットとなり、マルウェアへの感染や情報盗難に遭う可能性が非常に高く、今後、ネットの活用がさらに進むにつれ、このリスクはさらに高まる状況にある、ことが明らかにされた。とくに、現在は最大勢力となったボット bot、外部からの指令があるときや特定の時刻のときだけ行動するマルウェア などに見られるようにステルス化 発見しにくくなっている していることが、知らぬ間の被害を拡大している原因であることを強調した。次にくるのはスパイウェアの一部にはすでに仕込まれている rootkit である。主としてクラッカー(相手のサーバを破壊する)がつかう道具でウイルス対策ソフトなどでは見つからない。クラッカーの侵入の痕跡などをすばやく消すことができる道具だからだ。すでにネット上では大量に出回っている。ネット環境の危険な様相は、年々ではなく日々変化しているので、これを常にフォローアップする心構えを学生らに教えること、社会に出て周囲に迷惑をかけない卒業生にしなければならないことなどを語った。

まとめとして述べたのは、次の2点である。

- ・リスクの現状の認識、変化への対応の心構え
- ・一般ネットユーザの行うべきパソコン管理の基本

息子は、しっかりとメモを取って聴いていた。ためになる話を聴いたという十分な満足感で満ちたりた心で帰途につくことができたようだ。

琵琶

(13) 人生観と学習:「エイトキュービックモデル」の提案

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyosei log/2006/06/13_ba6d.html

2006/06/24

人生観と学習:「エイトキュービックモデル」の提案--感性的研究生生活(13)

6月24日(土)は、2つの講義(「情報システム論」「情報デザイン論」)の後、[「次世代大学教育研究会」](#)に参加した。私の発表があった。

私の講義の教室と研究会の会場が同じ建物の階違いという便利さだ。

しかし、私はといえば、風邪は引いているし、2つの講義（準備と講義の両方）でへとへとになっているし、発表資料の作成で徹夜はしているし、と最悪のコンディション。ままよ、と参加したものの、前半のおえらいお二方の講演では、こっくりこっくりと居眠りがでる。I先生、S先生ごめんなさい。隣に座っていたY先生が盛んに私のひざをつついて起こしてくれた。感謝です。

後半のトップバッターは私。講演タイトルは「いまどき学生の人生観と学習モチベーション」である。学習モチベーションをめぐる従来の1次元モデルと2次元モデルを質的に超えて、3次元モデルを提案した。それが「エイトキュービックモデル」である。社会性の軸と私欲の軸を直行系とみなして、さらに学生らの学習成果の軸を加えたモデルである。結果として、いまどきの学生をめぐる問題の核心をえぐり出すことに成功したように思われる。

そして、会に参加した大学関係者の心をえぐる発表となったようである。

発表の内容については、別の記事で述べる予定である。

[いまどき学生の人生観と学習モチベーション--心理、教育、社会性の発達\(21\)](#)

研究会後の懇親会では、この研究については文部科学省から予算が出るのではないかというご意見も出された。うれしい限りだが、この種の研究で、私は研究費をいただいたことはない。可能性があるのかどうか、慎重に関係各位にうかがってみたいところである。

琵琶
